

●玄関



実際に使用されていた提灯が迎えてくれる入口。

●炊事場



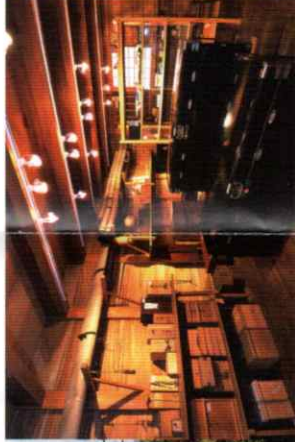
一日中賑やかだった様子が偲ばれる炊事場。

●土蔵(展示室)



庭の一角にある土蔵。中は展示室になっています。

●土蔵内部



伊藤家が保存していた貴重な品々を展示しています。

●茶室



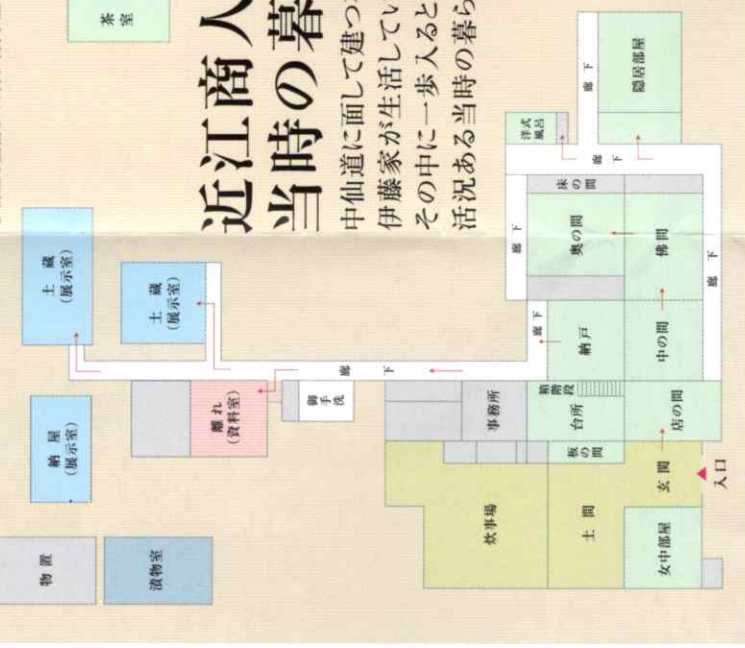
2000年に復元された茶室(利用可能)。



# 近江商人、忠兵衛と八重夫人の 当時の暮らしぶりに出会う。

中仙道に面して建つ初代伊藤忠兵衛の旧邸は、明治13年に建てられ伊藤家が生活していた頃そのままの形で残されています。その中に一歩入ると“近江商人”忠兵衛の  
活況ある当時の暮らしぶりが偲ばれます。

○納屋を整備して、新しく展示室が出来ました。



初代忠兵衛が使用していた洋式の帳簿類や二代忠兵衛愛用のステッキなど、当時が偲ばれる貴重な品々が展示されています。



●初代忠兵衛のレリーフ



●大阪本町の伊藤系店で  
使用されていた木版画ポスター



●明治19年(1886)頃に  
使用されていた帳簿類



●明治27年(1894)から  
使用を始めた洋式帳簿



●二代夫人が持参した産湯道具



●二代忠兵衛の  
愛蔵品が入った  
レコードケースと蓄音機

●女中部屋



女中が起居したり、物置としても使用されてきた。

●箱階段

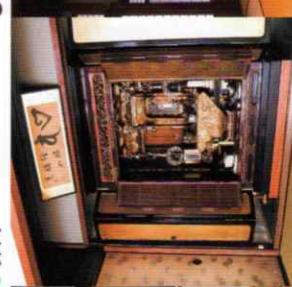


●店の間、中の間



店の間から佛間にかけて、初代及び二代忠兵衛に因る様々な資料が展示されています。

●佛間



●奥の間



●隠居部屋



●洋式風呂



明治40年代につくられた、  
当時は珍しい西洋風バスルーム。

## 近江商人の筆頭、初代伊藤忠兵衛



1842~1903

天保13年(1842)織物品の小売業を営む「紅長」の家に生まれた忠兵衛は、15歳で近江麻布の持ち下り商いを始めました。翌、安政6年(1859)には長崎まで足を伸ばし、そこで見た外国貿易の活況に刺激を受けたことが、わが国貿易のパイオニアとして、いちちはやく貿易業に進出するきっかけとなりました。  
初代忠兵衛は、明治5年(1872)に大阪本町に織物問屋「紅忠」を開設。問屋と同時に近代的な経営方針を打ち出しました。第1に「店員の販売権限と義務の明確化」第2に「社内会議制度導入」第3に「利益三分主義(本家・店・店員への配当制度)」第4に「運送保険の利用」第5に「洋式帳簿と学卒の採用」第6に「貿易業への進出」などで、いずれも当時ではきわめて革新的なものでした。  
明治36年(1903)61歳で水職するまでに、伊藤忠本店・伊藤兵店・伊藤染工場(5店)の事業を残すとともに、近江銀行・川崎造船所・大阪製紙・金中製織・その他建設、貿易、保険等十数社の事業にも関係していました。また、那珂郡豊郷村(現豊郷町)の村長も務めると郷土人にも愛されています。これは初代忠兵衛が心から自由を愛し、相手の人々の立場とその思想を重んじたからにははなかりません。

## 「総合商社」の基盤を築いた二代伊藤忠兵衛



1886~1973

明治36年(1903)に初代忠兵衛が61歳で他界し、その通夜の席で次男・精一が17歳の若さで父の跡を継いで二代忠兵衛を襲名しました。この後継者指名を行ったのは、初代の妻、八重夫人でした。そして八重は二代忠兵衛に伊藤各店の役職に就かさせず、丁稚小僧扱いで一人からたたき上げた。これによって伊藤本店への入店から5年の間、得意先に商品を担いで訪問する「地方回り」などの下積みを重ね、「帝王学」を学ぶこととなりました。  
明治42年(1909)、イギリスに留学した忠兵衛は、外国商社を通さず直接イギリスと商売をすれば、中間の利益がカットされ日本の利益に貢献できることに気が付きます。この経験が、今日の日本の「総合商社」の原点となっています。また留学中は、ドイツ、フランスからも織物を仕入れて日本経由で韓国にも輸出するなど、初代忠兵衛の持ち下り下の国際版として「総合商社」の3国間貿易の草分けとなりました。  
イギリス留学から帰国した忠兵衛は、本格的な国際化に向けて、海外の営業拠点づくりに奔走します。大正初期には、綿布は輸出を社とし、販路はアフリカ東海岸にまで及び、アメリカから紡績機の輸入などで著実に業績を拡大していきいます。その後、「伊藤忠商店」は本家の「紅長」と合併、「丸紅商店」が生まれ、現在の「伊藤忠商事」、「丸紅」へと発展していきいます。

## 豊郷本家における八重夫人の活躍



1849~1952

明治5年(1872)初代忠兵衛が大阪に店を構えた時から、豊郷本家における初代夫人、八重刀自の目覚ましい活躍が始まりました。  
大阪店で使用する江州米や八日市産のたばこの選定、味噌や梅干しの漬け込みをはじめ、毎半夏には大阪店のふとんを江州に持ち帰り、洗濯の上立を立て直していました。さらには、大勢の店員の昼、正月の着物の仕立てから下駄の調達まで行き届いた心遣いをしていました。  
特筆すべきは、八重刀自が初代忠兵衛の力強いアシスタントとして、江州での近江麻布の仕入れを一手に切り回していたことです。二代忠兵衛は「数万反の麻布を日に発送するときの総指揮から食事・弁当の準備まで全部母が主宰しておったが、いわゆるケアーパーブアルな人であった。」と回想録の中で述べています。  
八重刀自の最も重要な仕事は、新入店員の教育でした。当時伊藤忠本店に見習い店員として採用されると、まず豊郷の本家で1ヶ月、八重刀自からじっくりと店員としての行儀作法や、そろばん等必要な教育をほとんど行っていました。入店後に店員が問題を起こした場合も、直ちに豊郷本家へ送られ、再教育されるのが常でした。